

- ・協定校・研究者海外派遣 ————— (1)
- ・留学体験・協定校紹介 ————— (2)
- ・留学生行事・国際交流センターから — (3)

テテ工科大学と協定締結

2017年3月26日付で、モザンビーク共和国のテテ工科大学（Instituto Superior Politécnico de Tete）と大学間協定が締結されました。モザンビーク共和国は、鉱物のみならず高品質の石炭や天然ガスを有する資源国です。テテ工科大学は、最大の石炭鉱山がある北西部のテテ市にあり、資源開発・利用分野の重点大学に位置づけられています。学生数は現在2,000名ですが、石炭、天然ガス分野のエンジニアが慢性的に不足していることから、10年以内に10,000人まで増加させる予定とのこと。2015年7月にJICAより国際資源学部の佐藤時幸教授ならびに今井亮教授に「モザンビーク国鉱物資源分野における能力強化プロジェクト」への参画依頼が有り、その10月にはテテ工科大学のBernardo Miguel Bene学長ら3名が秋田に来られました。

その後、本プロジェクトの一環として理工学部の菅原や加藤貴宏助教が年2回のペースでテテ工科大学を訪問し、熱重量示差熱分析装置を設置するとともに石炭分析に関する講義や指導を続けております。また今井教授ならびに菅原の研究室にはプロジェクトに参画しているテテ工科大学及びエドゥアルド・モンドラーネ大学の教員や技術職員が毎年1ヶ月間実習のために滞在しています。さらに本年の4月から、エドゥアルド・モンドラーネ大学の卒業生が本学の大学院に入学しており、そして来年4月にはテテ工大の卒業生が同じく入学の予定となっています。交流活動が盛んになり始めたところでBene学長より、秋田大学との協定校締結の打診があり、晴れて今回の締結に至った次第です。



写真は、本年5月菅原ならびに加藤助教が企業コンサルタントの方々とテテ工科大学を訪問した際に撮影したものです（左から加藤助教、JCOALの田中氏、Bene学長、菅原、三菱マテリアルテクノ宮池氏）

菅原 勝康：Katsuyasu Sugawara 理工学部 物質科学科応用化学コース 教授

日中大学フェア&フォーラム

5月13日から15日にかけて、日中大学フェア&フォーラムが上海、杭州において開催されました。同フェア&フォーラムは、日本と中国の大学がトップレベルで交流することを目的に、国立研究開発法人科学技術振興機構と中華人民共和国国家外国専門家局の主催で行われているもので、今年で11回目を迎えます。

大学経営、大学の国際化など日中共同の課題が話し合われた14日のフォーラムでは、山本文雄学長が、秋田大学の国際化および人材育成について、国際資源学部の事例を挙げながら発表されました。また、日中大学個別会談では、協定校である東北大学、嘉興学院を始め、8つの大学の学長、副学長が秋田大学のブースを訪れ、今後の交流の可能性について意見を交わしました。特に、日本企業が多く進出している浙江省に位置する嘉興学院とは、企業でのインターンシップを含めた留学プログラム開発の可能性など、積極的な話し合いが行われました。

3日間に渡った同フェア&フォーラムには、日中あわせて100校（機関）を超える大学・（機関）が参加。連日行われた交流会においては、今後の大学間交流拡大の可能性とともに、同時期に北京で行われていた「一帯一路」国際会議も頻りに話題にのぼりました。

中国の大学の国際交流にける熱意が伝わる活気にあふれた3日間となりました。



日中大学フェアにて発表する山本学長

平田 未季：Miki Hirata 国際交流センター 助教

ヴェネツィアでの研究の日々

2016年5月から2017年3月まで、秋田大学研究者海外派遣制度により、イタリアのヴェネツィア・カ・フォスカリ大学のアジア・アフリカ研究科に客員研究員として赴任しました。研究としては、空間・言語・文化の境界を「移動する人々」が、移動の過程で、言語にまつわるどのような経験をしたのか、またその経験によりどのような言語意識を持つようになったのかを複言語主義の観点から考察し、言語意識が複数の言語を使用する個人のアイデンティティ形成および再構築にどのように関わっているのかを明らかにすることを目指しました。ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学にはイタリア随一の日本語専攻があります。日本語と日本学を学んでいる学生たちは、およそ2,000人にもものぼるそうです。滞在中、ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学のマルチェッラ・マリオッティ先生、早稲田大学の細川英雄先生と共に日本語専攻の学生を対象にワークショップを行いました。（詳細は <http://ichishima.thyme.jp/> を参照してください。）

ヴェネツィアでの一番の収穫は、研究コミュニティが広がったことです。世界中の様々な分野の研究者と交流することができました。多くの研究者が世界中を柔軟に移動しながら、自身の研究を深めていく様子はとても印象的でした。

市嶋 典子：Noriko Ichishima 国際交流センター 准教授



日本研究者たちと



ベニスの風景

留学 体験記

台湾 龍華科技大学

Lunghwa University of Science and Technology

大学では中国語と英語を学んでいました。中国語の授業は韓国人、ベトナム人の学生と学び、分かりやすく面白い授業でした。学んだ中国語をすぐに現地の生活で生かすことができるのが良かったです。

放課後は日本語を学ぶ学生と一緒に中国語、日本語を教えあったり、町に出て現地の人とおしゃべりをしました。台湾の人達はおしゃべりが好きなので、友人を含めいろんな人達と会話をして楽しく過ごすことができました。休日には友人たちと遠出して台湾の様々な場所に訪れました。台湾は日本と同じ島国であり、海や山など美しい風景が多くあります。

台湾の人たちの食事はほぼ外食なので、私も大体毎食外に出て現地の料理を楽しみました。日本の料理とは違ったおいしさがあり、文化の違いを感じる食事でした。また温暖な気候によって育てられた台湾の果物は、甘くおいしいです。文化の違いに戸惑ったり、言葉が通じなくて困ったことも多くありましたが、それ以上に楽しいことも多くありました。台湾での毎日はとても充実したものでした。みなさんもぜひ台湾に行ってみてはいかがでしょうか。台湾で学んだ中国語や経験を、今後どのように生かすことができるか楽しみです。

児玉 佳乃子 : Kanoko Kodama 教育文化学部 地域文化学科 地域社会コース 3年



日本語を学ぶ友人と淡水にて
(本人左から二番目)

フィンランド ラップランド応用科学大学

Lapland University of Applied Sciences

サンタクロースで有名な街での留学生活が始まり、半年が経ち、これまでの人生には無かった、新しく自分に刺激となる経験を既に沢山得ることができています。私は Lapland University of Applied Sciences という職業訓練学校の意味合いに近い大学で学んでいます。ここでの授業は、一般的な日本の講義とはかなり異なり、常にグループワークで、共に考え、意見を出し、課題もテストも共同作業です。春学期では観光を学んでいました。実際に観光地へ赴き、その収益向上や人をより呼び込むための新しいアイデアを考えたり、カスタマーケアの仕事をしたりと、実践的かつ大人から学生への信頼があるからこそ、成り立つ内容ばかりでした。大学以外の部分でも、感じることは沢山あります。

フィンランドでの生活はどこかシンプルで、常に自然と隣り合わせです。fire place でのたき火、snow hiking、アパートから見えてしまうオーロラ。これらを日常的に楽しみました。フィンランドは、日本と同じく何不自由ない先進国ですが、何かに追われる日本での生活とは違い、時間がゆっくりと流れます。フィンランドでの生活、ここで出会う人々のあらゆる場面に触れることで、自分があまりに豊かすぎる社会で生きてきたことを認識させられ、また同時に、その社会が何なのかを考えさせられます。今の段階で得たものとしては、明らかに自分の考え方に“幅”ができたことです。残り半分の留学生活も、必ず実りあるものにします。

馬場 実里 : Minori Baba 国際資源学部 国際資源学科 資源政策コース 4年



フィンランドの自然の中で

協定校紹介～蘭州大学～

5月10日に行われた平成29年度第1回海外留学説明会では、本学の交換留学生制度に関する説明や協定校の紹介が行われました。発表の一部をご紹介します。

蘭州大学は1909年に創建され、百年以上の歴史を持っています。蘭州大学は中国の近代高等教育で最も早く開校した学校の一つで、西北地方の高等教育の先駆となった大学です。

大学所在地の蘭州は中国の中原で、黄河の上流であり、西北地方でかなり重要なところですが、これによって、蘭州は歴史的、文化的な遺産が豊富です。ここで、多くの民族の人々が一緒に暮らしていて、素晴らしい多民族文化が形成されました。そして、大学も多様な人材を育成してきました。現在、蘭州大学は国際的にも有名な大学です。世界トップクラスの研究成果を示す新たな指標 Nature Index の2017年の結果によると、蘭州大学は中国で十位を取りました。在学生はおよそ三万人です。学部生が18,207人と一番多く、次いで修士9,109人、博士2,063人、留学生485人となっています。

また、蘭州大学には32個の学院があり、留学生は専門的に設置された国際文化交流学院に入ります。留学生の中国語の学習は国際文化交流学院で実施されていて、大学生、修士、博士の専門学習と専門知識は各学院によって実施されています。大学では留学生に食事、住居、交通、生活などの面で支援をしています。さらに詳しい情報は、蘭州大学文化交流学院のホームページを参考にしてください。蘭州大学は各国からの留学生を歓迎しています。

蘭州大学HP : <http://sice.lzu.edu.cn/HdApp/HdBas/DefaultEn.asp>

王 妍 : オウケン : WANG YAN 教育文化学部 特別聴講生



草木谷田植え体験

5月28日に、潟上市昭和豊川の山間にある草木谷で留学生と共に田植え体験をしました。この地は農聖と呼ばれる石川理紀之助が晩年を過ごした場所で、今でも環境保全のため無農薬で酒米を育てています。田植えも昔ながらの手作業で行いました。

ドキドキの田植え体験、日曜日の朝が来ました。みんな約束の場所に集まって、列車に乗って田んぼがある村に行きました。物静かな村に到着しました。静かな山の中の田んぼが久しぶりに、にぎやかになったようです。多くの人たちが、先に田んぼに入って田植えをしていました。伝統衣装を着た人や、学生たちや幼い子供たちも一緒に田植えをしました。私もすぐに田んぼに入りました。生まれて初めて水田に入りました。泥を裸足で感じながら、一歩ずつ前の方に進みました。最初は怖かったですが、時間が経つほど面白くなりました。苗を少しずつ間隔に合わせて植えました。空だった田んぼがいっぱいになりました。田植えが終わって田んぼを見ながら、下手ですが一生懸命に植えた苗がよく育ち、秋に美味しいコメができればいいなと思いました。都市化によって土を踏まずに生きる私たちは、土を踏んで触れる機会がどれくらいあるでしょうか。田植え体験は、より自然に近づく機会でした。



張 協鎮：ジャン ヒョプチン：JANG HYUBJIN 教育文化学部 特別聴講生

横手市農家民泊

6月3日、4日にかけて、教養基礎科目「日本社会入門」の課外活動として、横手市で農家民泊を行いました。当日は留学生17名、日本人学生7名の計24名が大森地区、増田地区の農家6軒に分かれて宿泊し、農作業を体験しながら秋田の農業の今について学びました。

横手での一泊二日のファームステイは、色々なことが体験できました。一日目、最初に田植えを体験しました。緑に囲まれてとても涼しい環境の中、自然を満喫しながら、田植えを体験できるのではないかと思います。始まって数分、自分の考えの甘さを痛感しました。普段やったことのない作業をして、私たちが普段何気なく食べているお米には大変な努力が隠されていることがわかりました。笑顔でお見送りして頂いて、田植えを協力してくれた方々と別れた後で、ファームステイの高田さんと会いました。会った瞬間から笑顔で迎えて入れてくれたので、農作業の疲れが一気にふき飛びました。

高田家のお母さんとお父さんと一緒に、少子高齢化や国際関係などの話題について話しました。夜にみんなで卓を囲んで、美味しい料理を沢山頂き、楽しい時間を過ごすことが出来ました。二日目、朝食は田んぼから取った新鮮なアスパラと高田さんの手作りのケーキを頂いて、最高に美味しかったです。しかし、なぜ楽しい時間は早く過ぎるのでしょうか。高田さんとお別れが辛かったです。別れの時、伝えたいことがうまく伝えられなかった為、機会があれば、また高田さんとお話しがしたいです。おかげさまで、貴重な二日を過ごすことができました。心から感謝します。



(本人写真右奥)

王冠帆：オウ カンハン 理工学部 システムデザイン工学科 機械工学コース 1年

-国際交流センターから-

■専任教員科研費助成事業採択結果一覧

研究者名	種目	課題名
佐々木 良造	基盤C	在日外国人情報弱者のための母語による子女の学校教育関連情報提供システムの構築
市嶋 典子	基盤C	中東地域の日本語教師と学習者の言語意識の把握と相互理解を目指した実践モデルの構築
平田 未季	若手B	共同注意確立活動における指示表現の選択と対話相手の注意の調整

国際交流センター人事情報（4月1日）

高橋 康弘 副理事（国際担当）→副理事（国際担当）・国際課長（兼務）

■国際交流協定校情報（平成29年7月20日現在）

大学間協定 30カ国・地域 58大学
部局間協定 9カ国・地域 17学部等

■秋田大学の留学生数（平成29年5月1日現在）

合計 194名
学部生 86名 大学院生 69名 交換留学生・研究生等 39名

発行者

国立大学法人秋田大学国際交流センター

International Exchange Center, Akita University

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1

TEL: 018-889-2856

FAX: 018-889-3012

Email: kokusai@jimu.akita-u.ac.jp

http://www.pcix.akita-u.ac.jp/inter/index.html